

---

# 仮面ライダーダーク 闇を纏いし戦士

夜遊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーダーク 闇を纏いし戦士

### 【Nコード】

N0105Z

### 【作者名】

夜遊

### 【あらすじ】

ガイアメモリ誕生時の話が書きたく書かせていただきました。1話完結の映画風にしようと思っています。

初めての作品ですので至らない点が多々あると思いますがご了承下さい。暇な時に投稿しますので速度は遅くなりますが完結を目指しますので応援お願いします！！またこの作品にはオリジナルライダー、独自解釈、妄想だらけ、です。

また仮面ライダーと書いていますがライダーは最初の方は登場しません。あしからず。

## プロローグ以前の話（前書き）

初投稿です！頑張ります！！（ 0 ） /

## プロローグ以前の話

ガイアメモリ、その1つ1つに地球の記憶が保存されたパンドラの箱。

人々は力を求めその箱に手を伸ばし禁じられた蓋を開けドーパントへ姿を変える。ある者は欲望のため、ある者は復讐のため、ある者は人々を守るため…代償は己の運命とは知らずに…。

この物語はガイアメモリ誕生時の1つの物語、1人の兵士の物語、そして語られない仮面ライダー、ダークの物語である。

時はとある無人島、正確にはその島に向かう飛行機の中から始まる。

## プロローグ以前の話（後書き）

いかがでしょうか？

ちなみに作者と主人公の名前は同じですが別人ですので！！

これからもよろしく願います！！

名前、煙草、戦場（前書き）

続けて投稿です！

いや疲れまっすねー文考えるの

## 名前、煙草、戦場

僅かに揺れる室内に彼らはいた。

彼らは国や性別はバラバラだが、それぞれ黒を主とした装備を施し、脇には各々の獲物を置いていた。

室内に漂う空気は重く、苦しかった。

彼らに特定の名称は無い、あるのはその時に書類作成時に適当に付けたその場限りの名称のみである。

合わせて十数人の集団にその男はいた。

男は黒髪を短く刈り揃え、左耳にピアスを付けていた。

彼も、いや彼だけではないが、名前を持たない1人だった。

彼もまたその場限りの名前があてがわれ、次の任務の時にはまた新しい名前が付けられる。その繰り返し、だが過去に1つだけ気に入った名前あり、以降、彼はその名前をあてがわれた名前の他に使っていた。

彼の名前は「夜遊」。

夜を遊ぶ。ふざけた名前だとわかっていたが何故かしっくりくるのだった。

いつ、変わるかわからない名前だが今現在、それが彼の名前だった。

煙草を吸いたい誘惑はその恩恵を味わった者に勝つ手段を与え無い、いくら歴戦の戦士であってもその誘惑には勝てなかった。

夜遊もまたその1人である。

彼は何本目かわからない煙草に火を付け煙からニコチンを体内に吸収していた。

そんな彼を戒める者はいない、彼等は煙草が何も身体に害を及ぼすだけの物ではない事を知っていたし、ささやかな幸せを制限する

権利は無いことも承知していた。

よって室内には夜遊の他数人が吸う煙草の煙が充満していた。

「相変わらず好きだね、お前さんも」

夜遊の隣に座っていた1人の男が話かけてきた。

肩まで金髪を伸ばし顎に整えた髭を生やした米国出身らしき男もまた煙草を吹かしていた。

「お互い様だろ、ラリー」

「今はジャックだよ、お前さんは夜遊でいいのかい？」

「できればそうしてくれるとありがたい」

この二人は簡単に言う「戦友」だ、歳も近く互いに尊敬しあい、よき友だった。しかしそれまでである。深すぎる友情は失敗を呼ぶ。そして失敗は死を意味していた。よって彼等は互いに踏み込まない。

今回の任務はとあるテロリストの排除。無人の島に潜伏している数名の罪人を平和の為に殺害する。

平和の為に必要な仕事。決して表に出せない仕事、人が知ったら後ろ指を刺される仕事。それが彼、夜遊の仕事であった。

気がつけば微かに揺れていた室内は完全に動きを止めていた。

夜遊は何も言わず煙草の火を消し、ただ歩き出した。

戦場へと。



名前、煙草、戦場（後書き）

いかかですか？

次の話は戦闘シーンです。

といつても仮面ライダーが出る話ではないんですけどね。

ちなみに主人公、夜遊は青年より少し年上、最低でも煙草を吸える年齢より上ですので！ダメ未成年喫煙！！

## 現在の戦場（前書き）

戦闘シーンです！仮面ライダーはいないですが……というよりも怪物は出てきません、怪物のような男の話です。

このシーンにはグロテスクなシーンが含まれています、気を付けてください！！

あと駄文で申し訳ないです。

## 現在の戦場

夜遊等部隊が無入島に到着して1時間が過ぎていた、今現在彼らは密林の中テロ組織と激しい銃撃戦を繰り広げている。

本来静かで緑の香を漂わせている筈の森の中には銃声の激音と仲間や敵の死体が放つ血の匂いが充満していた。

夜遊は木の陰に隠れながらマシンガンを脇に抱えタイミングを計っていた。

視界の端にはジャックが同じように銃撃戦を行っていた。ほかの間も同じだ。

戦争が盛んだった時代に比べ現在は平和になった。なんて迷信だ、時代が進むにつれ科学が進歩し、同時に兵器科学も飛躍的に成長を遂げた。

これらを用いて時代はさらに混沌を迎え、昔の鉛玉の雨など現在の戦場の弾丸の嵐に比べたら優しいものだろう。

どこの国の言葉が解らないが盛んに敵が騒いでいる、何かを呼んでいるようだ。

聴覚器官から得られる情報に限界を感じ、夜遊は木の陰から様子を覗いた。

「……」

1人の敵が手に持っている銀の筒を目にした途端、夜遊は木の陰から飛び出し弾丸の嵐の中を走り出した。

変化はすぐに訪れた。

最初は爆音、  
次は強烈な爆風、  
最後に強力な力の風が夜遊を襲った。

もし逃げるのが少しでも遅かったら爆発により身体が引き裂かれていただろう、仲間の何名かは逃げ遅れ身体のパンツが無くなっていた。

地面に倒れた夜遊はすぐさま近くの巨木に身を滑り込ませる、体中の骨が軋みを上げたがそんな些細なことを気にしていたら、待っているのは弾丸に身を引き裂かれる確実な死のみだ。

「やつこさん戦争でも起こすつもりかよ!?!」

横には同じく爆発から逃れたジャックがいた。

「普通、ランチャー持ち出すか!?!狂ってやがる!?!」

「人の事は言えないがな」

「はあ?」

ジャックを黙らしたのはまたもや爆音だった、しかし今度は離れたところからだ。

「なんだ?」

「確かここに来るときランチャーを愛しそくに撫でているやつがいた、どうやらそいつがやつたんだろう」

草むらの中からうれしそうに吠える男が現れるのが見えた。

「狂ってやがる…」

「だが奴らの攻撃が止まった！！行くぞ」

後ろで止める声が聞こえたが夜遊は無視し、マシンガンを乱射させながら敵陣に突っ込む！！

乱射により敵の何人かに風穴を開けた、しかしそこまでである。

マシンガンから弾が発射されなくなったのだ、弾切れか、弾詰まりか、理由はわからないが彼のもつ武器はただの鉄の固まりになったのは間違いないかった。

夜遊の反応は早かった使えない武器はすぐ破棄し、腰からサバイバルナイフを引き抜きろくに目標を見ずに投げる。

更に飛び上がりながら空中で2本目を投げる。

夜遊がテロリストの集団の中心に着地するまで約5秒、着地の瞬間、夜遊は一瞬ナイフの行方を探した。

2本のサバイバルナイフは吸い寄せられるようにテロリスト2人の眉間を射ぬいている。

残りの敵は3人！！

夜遊は1人の敵の懐に一気に距離を詰め拳を心臓の位置に叩き込んだ、さらに体制を崩した瞬間顔面に左足の膝をぶつけ、大きくのけ反ったところに両手で頭を抱え捻った。

敵の口から軽く空気が抜ける音とともに体内から首の骨が外れるくぐもった音が聞こえる。

残り2人。

敵の1人が銃を構え、引き金を引く、夜遊によける暇はない、だからあえて弾丸を真正面から迎えた。

抱えたままの死体を盾の代わりにして。

砂の入った皮袋をアイスピックで何度も突いたような音と感触を確かめながら距離を詰め、死体を敵に向け放り投げる。意表をつかれ一瞬敵の攻撃が止む、その一瞬で夜遊は地面に転がっていたナイフを手にし迷いなく振るう、正確には相手の首筋、耳の下の頸動脈がある部分に。

刹那、敵の切られた個所から大量の真っ赤な液体がまるで噴水のように吹き出し、魂と共に身体から抜けて行った。

あと1人。

最後の1人を視界の端にとらえ、ナイフを投げつけようとした瞬間、乾いた破裂音が響いた、夜遊には聞きなれた音「銃声」である。銃から放たれた弾丸は目標の頭部を静かに、激しく破壊した。

額から血液か脳の断片かわからない物がはじけ飛ぶ、夜遊はその光景を

目の前で見ていた。

敵が倒れる、後ろから足音が聞こえ振り向くとそこには

「たつく1人で手柄とるなよ、報酬が減るだろうが？」

ライフルを担いだジャックがいた。

## 現在の戦場（後書き）

気が付いたらいつもの倍書いていた。

わかりにくくて申し訳ないです。

書いている途中で「こんなの入れたらよくな？」と本来の下書きした物に追加していったら文が予定の倍に&形が無茶苦茶に……

こんな感じで続くと思います。が応援お願いします。

夜遊、静、源三郎、そして楽園（前書き）

今回は敵の黒幕がメインです。



## 夜遊、静、源三郎、そして楽園

夜遊等が戦闘を行っているその頭上にそれはいた。それは小さく、音もなく、気配もない。

とある生物を模して造られた機械の役目は撮影である。

とある科学の街で開発されたそれは本来、立て籠もり事件や崩壊した建物内部の撮影を目的とされていた。

しかし今はサッカーの試合のテレビ放送のように血なまぐさい戦闘の模様を持ち主に届けていた。

暗い室内、唯一の明かりは画面に映し出される映像の明かりのみである。映像を見ているのは2人の人物だ。

1人は高そうな椅子に座りまるで子供が初めて映画を見ているように目を輝かせる男、もう1人は少女。男の隣にたち、ただ黙って感情の無い瞳で映像を見ていた。

戦闘が終わり、島にきた兵士達が帰って行く。その姿を見ながらおもむろに男が話始めた。

「彼らが今回のお前のエサだ、静」

「……はい、源三郎様」

「今回のメインディッシュはこの男、通称は夜遊」

男手元のリモコンを操作し画面にデータをだす。

「この世界ではかなり有名な男だ、今までの戦闘ではほぼ負けなし、功績は数知れず、この男が軍人ならばすでに英雄と呼ばれても不思議

議ではない」

さらに操作し先程の対人戦の映像を映し出す。

「この男の長所はこの類いまれなる戦闘能力に加え、超人的な反射神経、噂では至近距離からの弾丸もかわせるらしい」

「彼も能力者で？」

「いやいや奴はただの人間、お前たちモルモットとは違うよ、恐らく天性の才能、数々の戦闘で培われた経験だろう」

だが、と源三郎は続ける。

「お前のメモリの力には及ばないだろう」

部屋の扉が開き白衣を着た手下が盆を持って入ってきた。

盆の上には1つの機械と黒いメモリが置かれている。

源三郎はメモリを手に取りボタンを押した。

『ダーク』

満足そうにダークのメモリを盆に戻し源三郎は笑い始めた。

「フフフ、待っている琉兵衛、もうすぐ貴様を帝王の座から引きずり下ろしてやる…!!」

源三郎は自分の懐から金色のメモリを取りだしボタンを押した。

『エデン』

それを自身の喉仏に差し込む。

眩い光が源三郎の身体を包む。すると源三郎の身体は左肩には枯れた木々、右肩には様々な果実を、左右非対称の顔に緑色の瞳を持つ黄金の怪物に姿を変えた。

怪物の名はエデンドーパント。楽園の記憶を持つ源三郎のもう一つの姿だ。

エデンドーパントは少女にダークのメモリを渡す。

「さあ行こう、静。食事の時間だ」

「はい、源三郎様」

少女はエデンドーパントの手を掴むと2人の身体を光が包む。光が消えると2人の姿も消えていた。

夜遊、静、源三郎、そして楽園（後書き）

エデンドーパントが今回のラスボスです。

完全オリジナルの敵ですから無茶苦茶強いです。

やっとドーパントをだせました、次の話は仮面ライダーを出します

！！

応援お願いしますm（――）m

疑問、裏切り（前書き）

遅くなりました！！ごめんなさい！！  
仮面ライダーが出せない！！

## 疑問、裏切り

夜遊達は海沿いの崖に来ていた。

仕事が終わわり、向かいの飛行機が来るのを待っているのだ。

「よっ」

岩に腰掛け煙草を吸っているとジャックが話かけてきた。

「お前さんこのあとかなり暇だろ？」

「ああ」

彼等の仕事はなにも毎日有るわけではない、一回の仕事で得られる金額は多いが次の仕事が来るのはいつになるか誰も知らない。

「だったら一緒に日本に遊びに行こうぜ、一度行って見たかったんだ、忍者、寿司、天ぷら、富士山、芸者、大仏！！」

「ああ」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「アもう！！なんだよ何が気になっているんだよ！？」  
ダ……………」

沈黙に耐えられずジャックが吠える。

夜遊が無口なのは知ってるがこんなにしゃべらないのは決まって何

か考えている時だった。

「あいつらの武器」

「アン？」

「どうもおかしい」

「何が？」

「銃自体は旧式のものを使っていたが中身の弾丸は見たことのないものだった。こいつを見てくれ」

夜遊は1発の弾丸をジャックに投げた。

「奴らが使っていた奴だ、こいつにやられた奴は通常の弾丸で受ける傷よりも破壊が大きかった」

「その正体がこの溝か？」

ジャックが弾丸を太陽にかざすと薄っすらだが線のような溝が見えた。

「おそらく人工的に溝を掘り、空気抵抗を利用して弾丸の威力を上げているのだろ」

「へえ、考えるねえ」

「戦争は日々進化している、そいつも最新技術なんだろう」



だが、と続ける。

「あんなテロリストどもがなんで最新の技術を持っているんだ？」

「おいおい怖いこと言うなよ、なんか知っちゃいけないことを知ることになりそうなんだが……」

夜遊の勘は当たるのだった。

「あの野郎、聞いてねえぞ！！あんな化け物集団が来るなんて！！」

男は浜辺を走っていた、装備や外見から先程、夜遊達と戦闘を繰り広げていた集団の1人とわかる。

仲間を捨て早々にあの場から離脱した為、命拾いしたのだ。

「逃げるとは哀れだな」

「ひっ！！！！」

振り向くと怪物がいた。

外見的には初老を向かえたばかりに見える、源三郎だ。

「どお言うことだ、木原！？来るのは素人同然の武装集団って話だつたる！！だからメモリは必要無いって！！」

「別に気にする事ではあるまい、全てはシナリオ通りなのだから。」



疑問、裏切り（後書き）

次こそ夜遊と源三郎を会わせます!!

あと仮面ライダーの映画は最高です。

でわまた今度!!!

## 筆休み

どーもー筆休みと称しての駄弁り会です。

ここでは作品の簡単な説明や作者の愚痴を書きたいと思います。 m

——— ) m

初めに謝罪を。

仮面ライダーと書いておきながらまだ一度もライダーを出していないことを許して下さい！

恐らく主人公が変身するのは小説内では一度切りになる予定です。

ライダー自体は何度か出す予定ですが。 ( ( ( ^ | ^ ; )

原作に対して

仮面ライダーダブル。

とある科学の超電磁砲。

この二つを題材に作品を書いていますますが原作のキャラクターは誰も出て来ません。

舞台も風都や学園都市ではなく全く別の場所になっています。

しかし作中の中にちょこちょこ二つの作品を混ぜていますので探してみてくださいね

(。・。・)

夜遊とは

夜に遊ぶと書いて夜遊。

なんとも痛々しい名前を使っていますがこの名前は昔から気に入っている名前です。

ユーザー名と主人公が同じなのは私なりに葛藤がありました、はじめての作品の主人公の名前は夜遊にしたい、だけど作者名も夜遊にしたい、とどーでもいいことで悩み考えた末にユーザー名と主人公

が同じ名前にしてしまいました。(・・・)

### 今後の展開

実は最終話はすでに出来上がっています。

しかし中盤の部分は全く出来ておらず苦労しています。

次の話から本格的に仮面ライダーを登場させようと考えていますのでお楽しみに( ^ | ^ )

### 最後に

私が仮面ライダーという作品に初めて会ったのは平成ライダー1号の仮面ライダークウガです。

クウガは一目で幼い私の心を鷲掴みしました。それから仮面ライダー作品は私の生活にとってなくてはならない物へと変わって行きました。

にじファンで小説を書かれている他の作者様の仮面ライダー作品を見た時、私も書きたいと思いがこみ上げ筆を取りました。

最後になりましたがこれからも仮面ライダーダーク 闇を纏いし戦士をよろしくお願いいたします。

交戦（前書き）

ライダーが登場、その時夜遊は。

……やっとライダーが登場

## 交戦

「なんだ!？」

突然こだました叫び声に待機中の戦士達は動揺していた。

「誰の声だ？」

「テロリストの残党共が同士討ちでも始めたか？」

「何やともあれ見に行かなくては行かないだろう」

彼らの仕事はテロリストの殲滅もしまだ残党がいるとしたら任務失敗になりかねない。

そんな思いが彼らの足を進みださせた。

しかし

「……………」

闇はすでに近くに迫っていた。

そこには白いワンピースを着た少女が立っていた。

場違い、

そんな言葉が一番合っているだろう。

ここは無入島で海岸沿いの崖上で戦場なのだから。

人は想定外の出来事が起こると思考が停止する。

その場に奇妙な静けさが訪れる。

先に動いたのは、少女だ。

少女は腰に装置のような物を巻き付け、そして右手になにやらUS  
Bメモリののような物を持ち一声小さく、恐らく全員には聞こえない位に呟いた。

「……………ごめんなさい」

彼女はメモリに付けられたボタンを押すとメモリから音声流され



る。

『ダーク』

機械音が鳴り、少女は腰に付けられた装置にメモリを差し込んだ。

「変身」

メモリを右に倒しながらその言葉を呟くと変化はすぐに訪れた。

『ダーク』

少女の、周りの木々の、岩の、足元の草の、様々な物体の影がまるで生き物のように蠢き立体となり黒い霧になり少女を覆い始めた。

霧が晴れたそこにはもはや少女の姿は無い、代わりにそこには居るのは黒いボディーの謎の人物がいるのだった。

目の前で起きた現象に言葉を失いながらも夜遊はそれを観察していた。

身長は高め、スリムな体つきをしており色は黒一色。

夜遊がまず目に付いたのは腰に付けられた装置、先程の少女がつけていた物と同じようだ。

次は右腕、腰に付けられた装置のUSBメモリが差し込まれた部分と同じ、軽量化した籠手が付けられている。

最後に顔、口や鼻は見当たらずのっぺらぼうのような顔には二つの眼しか無かった。

例えるなら豹、茂みから獲物を狙う鋭い眼光を想像するなかのように黄色い眼が黒い顔面にあった。

しかしそれ以上の特長は何も無かった。

何もない故に感じる存在、目の前に居るのにも関わらず幻のように感じられる。

しかしそこにそれはいるのだ、決して無視できない圧倒的な存在感、圧迫感。

そしてそれは動き始めた。

簡単な動作だった。

距離を詰めるためにそれは走り出したのだ。

そしてようやく夜遊も動き始めた。

彼は手に持っているマシンガンの引き金をそれに向けて引いた。

銃身から無数の弾丸が発射されそれを襲う、生身の人間なら肉体を構成する細胞や肉や骨や血管を引き裂き絶命していただろう、たとえ特殊装甲の鎧をまもっていても動きを止められる。

しかし

(?!効いていないのか!?)

それは無数の弾丸を体に浴びながらも走りを止めなかった、まるで突然の雨に打たれているかのように弾丸の雨を突き進む、

そして

飛んだ。

ジェットエンジンの類いの装置を使っているわけではない、ただの脚力のみジャンプなのだが、それは簡単に3メートル級の高さを飛んだのだ。

空中で拳が握られる

それを目にした夜遊は咄嗟に体を後ろへ飛ばした。

次の瞬間夜遊の前にいた戦士に頭上からそれが拳を突き刺した。

そう突き刺した。

これは比喩ではない。

文字どおり首の下あたりの胸を拳が貫通し、

内臓を蹂躪し、

背骨を砕き、

背中から突き出しているのだ。

唯一の救いはその戦士が何もわからずに絶命したことだろう、彼は、彼の体は2、3度軽い痙攣をおこし動かなくなった。

歴戦の戦士の1人を1発で仕留めたそれは、拳を体から抜き、しばらく彼の遺体を眺めていた。

眺める

この時その行為の真の意味がわかる者は何人いたのだろうか？

この時そのことに気が付けたのはその一連の行為をすぐ近くにいた夜遊しか気づけなかったのかもしれない。

その時彼は目に前にいるその心の奥底にある純粋な想いを叫びを聞いた気がした。

それは

黒い謎の襲撃者は

彼女は

あの少女は「」言っているかのように感じた。

「助けて」

と。

## 交戦（後書き）

いやー駄文で申し訳ない。

何も知らない人間が、今まで銃やら爆弾やらを使って戦場を駆け抜けてきた战士们が、目の前で未知の技術、「仮面ライダー」を見たらどうするのだろうか？そう思って書きました。最後はやっつけ感満載ですいません。

次回、彼女の声を聴いた夜遊がとる行動は？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0105z/>

---

仮面ライダーダーク 闇を纏いし戦士

2012年1月14日01時45分発行